忠臣蔵の裏表

第三回

講談師　一龍斎貞花

私ども講談師が、張扇を叩いて義挙と語り継いでいる忠臣蔵。二回にわたっていざこざを書いてきましたが、いよいよ殿中刃傷です。

元禄十四年（一七〇一）三月十四日、松の廊下で、「遺恨、覚えたかっ！」殿中御法度の掟を破って吉良上野介に斬りつけた浅野内匠頭。三十五歳の壮年の内匠頭が、六十一歳の上野介に二度まで刀を振るいながらなぜ殺せなかったのか。相手を倒すには切るのではなく刺すことと厳しい見方がある。登城の服装長裃なのを大紋烏帽子と恥をかかされたというが、十九年前にも接待役を務めている。料理の献立なども記録してあればなんでもないこと。勅使は毎年来るので、大名は一年置きとはいえ登城するのだから、なにを着ていたか覚えていたはず。しかも内匠頭は切腹申し渡され田村右京太夫の屋敷につくや、

「持病の痞（つかえ）あり心を静められなかった」あげ句「酒を所望、煙草を喫したい」と言ったが拒否されたと「江赤見聞記」にある。痞とは、胸がつまり息苦しくなる。疲労が重なると出やすくなり一種の神経症。当日は朝から雲低く垂れ木の芽どきとあって、精神に障害のある長矩、朝食も十分に食べていなかったかもしれない。しかし一国一城の主、殿中で刀を抜けば身は切腹、家は断絶。やはり堪えきれない確執があったのであろうか。

内匠頭は即日切腹、上野介はお構いなし。世論はけんか両成敗もあるのにと、官僚に対する批判もあったのであろう、浅野家に同情。

お家断絶

城明け渡し、大石内蔵助の命令で隅々まで清掃して、武器類の数もきちんと列記、生類憐みの令の時代とあって犬は城外へ出ることもあり数を減らして提出するも、受取りの脇坂家が苦労して犬の数をチェックするも二匹少ないとあって大童、幸い子犬が八匹生まれたので帳尻を合わせることが出来たとも。幕府へ犬の数まで報告しなければいけないというのだから大変でした。

城を枕に討死と息巻いた連中も次々と離脱、その多くが高禄者。家老の大野九郎兵衛もさっさと逃げ出したという説が多いが、藩札の支払いを六割と決めたのも藩士へ退職金を払うためで、決めたのは九郎兵衛。九郎兵衛は、上野介が息子の上杉領へ逃げる時、途中で待ち伏せして討つ用意をしていた忠臣の説も。お墓が山形の道筋板谷峠にあるところからである。

大石内蔵助の決心

大石は、浅野家再興を願って奔走するも認められず、されば仇討ちを決意。

浪士たちの動静を探るための間者はいたろうが、多くの作家が上杉家の家老知恵者の千坂兵部の指図でスパイ活動を書いているが、実際はそれほどではなかったのではなかろうか。

仇討ちをするためには、上野介の動静を探ることの方が必死だ。

浪士の情報活動は、世情にたけた神崎与五郎が麻布の上杉家の屋敷近くに、

前原伊助は、吉良邸裏門近くの本所相生町に米屋、または雑貨屋を開き店売りのほか行商もしていたという記録がある。その後神崎は前原の店と合併して活動したという。前原が米屋をしていた住居跡の碑が立てられている。

当時は、徒党を組んでの行動は法度だったから正しくは火事装束。ひそかに討入るのだから陣太鼓を叩くのは間違い。お芝居を面白くするため。

堀部安兵衛、赤垣源蔵が酒豪とされるが本当は下戸。豪傑が下戸では面白くないのでご愛敬。

約二時間の戦いの後、物置に隠れていた老人を見つけて引きずり出し、名前を聞いても名乗らず、白無垢の小袖を着ているので、普通の者が着るはずがないと脱がすと背に刀痕、上野介と判明というが、討入り後細川家に預けられた大石の供述では、

「みんな血まみれ、泥まみれで人物が特定出来ない。服に焚きこめたお香が身分の高い人しかつけないものだったから判明」という古文書がある由。細川家は、浪士たちを武士の鑑として帯刀を許し、毎日朝昼晩2汁5菜の食事でもてなし、流石の大石らも、

「あまりのご馳走で胸がつかえますので、何とか食事を軽くして頂きたい」

という要望書も残っているという。

浪士の処分

四十七士の討ち入りは、忠誠を世に示した英雄なのか、秩序を乱した犯人か、儒者の間で意見が二分。

柳沢吉保の儒臣萩生徂徠は、

「亡君の仇を討ったと称しているが心得違い甚だしい。浅野長矩が義央を斬ろうとしたのであって、義央が長矩を斬ろうとしたのではない。長矩は咄嗟の怒りに義央を斬ろうとした。匹夫の勇であって、これを武士の仇討ちといえようか。不義の臣というべき」

厳しいが図星でもある。

法理論からいえば浪士は極刑、打ち首のところ将軍綱吉は、赤穂浪士の人気から士分の面目を尊重して切腹を許した。綱吉の心づかいといわれる。

浪士は四家の大名家に50日間お預けとなり翌年の十五年二月四日切腹。

浪士の子弟十九人が伊豆大島へ遠島。のち許されて帰国している。

当初は赤穂の浪士と呼ばれていたが、上野東叡山寛永寺一品（いっぽん）親王宮様が、赤穂の義士と言われたところから、赤穂義士と呼ばれるようになったのです。

可愛想なのが上杉の付け人たち。赤穂浪士の敵となっているが、上野介を守る役目を果すべく戦い17人討ち死。四十七士は死者一人も無し。

吉良家当主となった義周（よしちか）も小長刀を持って奮戦し負傷するも、

「義周の仕（つかま）り方不届きにつき、領地召し上げの上、諏訪安芸守にお預け仰せつけられるものなり」

駕籠には網をかけ、外から錠がかけられ重罪人扱い、付き従う者は二人のみ道具は長持三棹につづら二つ。

狭い一室に幽閉されひげを剃るにも自殺の恐れありと、かみそりを使うこと許されず髪もひげも鋏（はさみ）を使い一汁一菜、十八歳の義周空腹の日々。父上杉綱憲心労から病状進み我が子義周の身を案じつつ42歳で逝去。それから二カ月後上野介妻富子も、我が子綱憲の後追うように亡くなり、配所の義周は実の父と義母である富子の死を知らされ、憂いの日々を過ごし日増しにやせ衰え、昼も夜も同じ下着に同じ着物、垢にまみれ虱（しらみ）が身体をはい、やがて身体はむくみ宝永三年一月二十日、21歳の若さでこの世を去った。なきがらは取捨てるよう命ぜられ中州村法華寺に埋葬され、奥の杉林の中にお参りする人とてなく自然石のお墓が建てられている。

最期を看取った左右田孫兵衛が義周の遺骨を持って吉良へ、吉良家の菩提寺華蔵寺（けぞうじ）に、

「公よ忍べ、ただひたすらに忍べよかし、公の隠忍（おんにん）は、知る人のみ知る真の強さなればなり」

と刻まれた義周追悼の碑が哀れをさそいます。

吉良家は義央の弟義叔（よしとし）の孫義学（よしあきら）が八代吉宗の許しを得て、吉良家再興。

赤穂の浅野家は再興されていません。

昭和30年、吉田町と横須賀村が合併、「名君吉良上野介様の善政に感謝して吉良町とつけよう」地代の高い東京両国に吉良家の屋敷跡が残されている。悪人と言われる人の名をつける町や屋敷跡を残すことがありますでしょうか。それが吉良の名をつけたことをみましても、後世の人々にもいかに慕われているかが判ります。

栄光の陰げに悲哀あり、

人生にも明暗あり。

物事には必ず表と裏がありましょう。

忠臣蔵の裏と表を申し上げました。